

Ф. И. チュツチェフ政治詩試訳(14)

大 矢 温

はじめに

「Ф. И. チュツチェフ政治詩試訳(1)～(13)」に引き続き、おもにタラーソフ編集のチュツチェフ著作集『ロシアと西欧』¹において「哲学詩」として分類された作品を中心に、チュツチェフの詩作の中から彼の政治思想を分析する手がかりになりそうなものを選び、6巻本の全集をテキストとして訳出を続ける。

1) 無題²

ここで猛り狂った生命から、
ここで川となって流れた血から、
何が生き残ったのだろう、なにが我らまで届いたのだろう？
今日に至るまでその姿を見ることができるのは 2-3 基の古墳…

そう 2-3 本の樫の木がその上に育った、
広く、堂々と枝を広げて。
美しさを誇り、音を立てている—それらには関係ない
誰の屍が、誰の思い出がその根に蝸集しようとも。

自然は、どうやら、過去について知らないらしい、
それは我らの移ろいやすい時代とは無縁だ、
その前で我らはおぼろげに意識する
自然の夢見に過ぎない—自分自身を。

自らの無益な貢献を達成した、
自らの子たち全員に順番に、
自然は等しく挨拶する
すべてを飲み込む天地創造の無底によって。

歴史・文学古文書館に残されている娘マリアのアルヒーフに保管されている手稿に「フチーシュ **Вчиж** への道すがら」と書き込みがあることから、チュツチェフの所領、オーフスツクから 6 キロメートルほどの所にある遺跡フシチイシュ **Вчиж** を 1871 年の夏に訪れたときの作詩と考えられている³。このフシチイシュは、13 世紀までフシチイシュ公国の中心地だったが、モンゴル人の襲来によって滅ぼされ、その後は廃墟になっていた。ブロックガウス・エフロン辞典によると 19 世紀まで 17 の古墳と教会の壁が残っていたという⁴。1840 年代に A. C. ウヴァーロフによって発掘調査が行われたので、チュツチェフも調査報道等での古代遺跡に関する情報を得たと思われる。

古墳を前にして、悠久の自然と人生のはかなさに思いをめぐらしている。人間とは「自然の夢見」に過ぎないのだ。そして人間の「貢献」は「無益」であり、人はみな、「順番に」「等しく」「天地創造の無底」に「飲み込」まれる、という。

川を流れ行きながらも最期には「宿命的な無底に合流する」氷塊に託して人生のはかなさ、人生の意義を「汝の意義はかくのごとくか?」「汝の運命はかくのごとくか?」と詠った「無題（見よ、川面の広がり…）」⁵にも通じるテーマである。

2) ポリトコフスカヤの思い出⁶

Elle a été douce devant la mort

多義的なこの単語が
お前によって再び証明された：

Φ. II. チュツチェフ政治詩試訳(14) (大矢 温)

すべて現世的なものが亡びる中で
お前がいた—柔和と愛が。

墓場の闇を直前にして
最後の時にも潤れることはなかった
お前の愛に満ちた魂の
汲めどもつきぬ蓄えは…

まさにその愛の力をもって
お前は自らを裏切らず
最後まで耐えた
人生のすべての苦役、すべての日々の問題を、—

まさにそのすべてに打ち勝つ
好意と愛情の力が
退くことなく影を落とす
お前の最後の時に。

そして謙虚で従順なお前は、
死のあらゆる恐怖に打ち勝って、
死に向かって心優しく進む、
父の呼びかけに応じるがごとくに。

おお、お前を愛する、いくつの魂を、
おお、血を分けたいくつの心を—
お前の命によって生きた心を、

お前の早い最期は撃ったのか。

私は晩年になってお前と出会った
私の人生行路において、
だが、心からの憂愁をこめて
お前に言う：許しておくれ⁷、と。

我らの絶望的な疑惑の時代に、
不信心によって病んだ、我らの時代に、
ますます闇が濃く集まるときに
野生化した地上の世界に、一

おお、たとえ恐ろしい別離状態にあっても、
そこで生きるべく我らが運命づけられた、一
それでも一つの啓示がある、
無事残った環がある

あの世の大いなる秘密と共に、
まさに、それを一我らは見、信じる一
お前にふさわしい、魂の出立を、
我らの闇からのその出立を…

1872年3月3日の日付で新聞『市民』の編集者B. П.メッシェルスキーに送られたもの。作家で翻訳家のポリトコフスカヤに捧げられたものとされているが、チュッチェフと彼女との関係はよく分からない⁸。

「甘い、うまい、心地よい」あるいは「優しい、懐かしい」、さらには「穏和

Ф. И. チュッチェフ政治詩試訳(14) (大矢 温)

な」と言った多義的な内容を持つ *douce* というフランス語の単語を使って亡きポリトコフスカヤを追想している。上述のようにチュッチェフと彼女との関係はよく分からないが「ты」で呼びかけていることから親しい関係であったことが分かる。最晩年のチュッチェフは、70年7月には長男ドミートリを、同じく70年12月には兄ニコライを、そして71年6月には娘マリアをと、立て続けに親しい身内を失っている。

3) 1818年4月17日⁹

私の幼年時代の曙に
それは早朝のクレムリンでのこと、
それはチュードフ修道院でのこと¹⁰。
私は静かで慎ましい、僧坊を訪れた、
当時そこには忘れ得ぬジュコフスキーが泊まっていた。
私は期待して、彼を待っていた
私はクレムリンの鐘の唸りを聴いていた、
雲一つない紺碧の中を舞いあがっていく—
青銅の嵐を見守っていたのだ、
突然大砲の一斉射撃がそれに代わる—
みなははっとした、その唸りの意味を理解して。
秋の最初の日に紺碧と金色の
祝いの日 Moskva 上空は
明るく煌めく紺青と金色の軍旗で舞い上がった。
それは最初に私に届けられた知らせ、
この世に新しい住人がいるとの
クレムリンに新しい皇帝の来訪者がいるとの
この時に御前はこの地上に贈られたのです。

それ以来その思い出は
私の魂の中で暖められていた
心安くいとおしくー
何年にもわたって変わらず生きた、
全生涯にわたってかくも正しく私を導いた。
今もまた、朝の早い時に、
その思い出は変わらず大切でいとおしい、
私のみじめな床を訪れ、
この天恵の祝日を告げた。
私には常に思われる、
この幼年時のまさにこの時が
わたしに一生、良き前兆となるであろうことを。
そして私は誤らなかった。私の全人生は
その穏和な安らぎをもたらす影響の元で過ぎたのだ。
そして運命の慈悲により
私は幸せを運命づけられたのだ、
私の全時代、私は頭上に
いつも一つの星座を見ていたというー
彼の星座をーそして最期までそれが
私の唯一の星座でありますように。
何度も、何度も
この日を、この世界を、私たちを喜ばせ給え…

手稿に書き込まれた日付から 1873 年 4 月 17 日、つまりアレクサンドル二世の 55 才の誕生日、の作とされている¹¹。ちょうど 55 年前、モスクワのクレムリンでアレクサンドルの誕生を迎えた日のことを回想している。当時 14 歳のチ

Φ. II. チュッチェフ政治詩試訳(14) (大矢 温)

ユッチェフは父親イヴァンにつれられて、クレムリン内のチュードフ修道院の僧坊にジュコフスキーを訪ねた¹²。

この時期、ジュコフスキーはペテルブルクのポリシャヤ・メシチャンスカヤ通りに住んでいたはずだが、ニコライ大公（後のニコライ一世）妃のマリア・フョードロヴナのロシア語の教師をしていた関係で大公妃の出産のためのモスクワ行きに同行したものと思われる。1817年10月にはモスクワに到着して旧友のライチやチュッチェフの両親とも会っている¹³。

他方この時期のチュッチェフはモスクワ大学の聴講生だったが、正式の学生となるべく準備をしていた。幼い頃から語学に秀でた才を示したチュッチェフは、3月には「協力者」としてロシア文学愛好会に入会を認められ、翌年11月にはモスクワ大学に正規の学生として登録されている¹⁴。

アクサーコフによれば自らの死を3ヶ月後に控えたチュッチェフが麻痺した舌で、妻エルネスチーナにこの詩を口述筆記させたという¹⁵。この後、アレクサンドル二世は病床のチュッチェフを見舞おうとしたが、チュッチェフは固辞し、代わりに「アレクサンドル二世に」を作詩した¹⁶。チュッチェフの詩においてはしばしば「星」は魂の謂いであるので最期から4-5行目の「星座」とは皇室のことと解するべきである。ロシアの皇室に対する終生変わらぬ忠誠がこの詩のテーマであろう。

4) 不眠症¹⁷

(夜の瞬間)

都会の砂漠での夜のときに

憂いに貫かれた、一刻がある、

街全体に夜が舞い降り、

至る所に霧が訪れるときに、

すべては静かに沈黙する；そして今突然月が昇った、

そして今灰青色の夜の月の輝きに
あるのはただ、はるかにかすむいくつかの教会、
金葺きの丸屋根のきらめき、物憂げな、薄暗い間隙が
ひっそりと眠れぬ瞳を射る、
私めの中で心は捨てて子です¹⁸、
捨て子のように嘆き、そして悩む、
絶望的に訴える、人生と愛について。
しかし心はむなしく嘆き、そして黙るのだ：
その周りはずべて空虚で暗い！
さらにもう一時間悲しげなうめき声が相変わらず続く、
しかしそれはしまいには、弱まって、静かになる。

1873年4月の作。この年の初めからチュッチェフは寝たきり状態になっていた¹⁹。すでに前年の12月に発作に襲われていたにもかかわらず、正月に散歩のために外出した際に再び脳卒中の発作に襲われたためだ²⁰。左の手足が麻痺し、会話も不自由になり、上述のように詩も口述筆記するようになっていた。5月にツァールスコエ・セローに移るが、この詩はそれ以前の作²¹。7月15日に死亡。18日ノヴォデーヴィッチ修道院の墓地に埋葬される。

5) 無題²²

宿命的な日々がある
最も残忍な肉体の病と
恐ろしい道徳的な不安の；
人生は我らの上へのしかかり
我らを窒息させる、悪夢のように。
幸いなるかな、そのような日々

Φ. II. チュッチェフ政治詩試訳(14) (大矢 温)

いと慈悲深い神が
計り知れぬ、最高のたまものを遣わす人は—
それは友人の同情のこもった手、
その生き生きとした、温かな手が
軽くではあるが、私めに触れるのです、
虚脱状態は霧散し、
私めからぞっとするような悪夢を取り去る、
そして運命の打撃を防止する、—
人生は復活し、血液は再び流れ出し、
そして心は真実と愛を信じるのです。

「チュッチェフの作とされるもの」

6 巻本全集の最期に「チュッチェフの作とされるもの」として、従来、チュッチェフの作とはされていながらも作者が確認されていないものが所収されている。以下、「チュッチェフの作とされるもの」として分類されている詩を素材に、試訳を続ける。

6) 無題^{2 3}

オーストリアの皇帝は冗談癖がある
自分も敵も味方にも—
ナポリは彼に鼻をくっつけた
ロシアは皇帝に角を。

20年代の手稿アルバムから発見されたものだが、チュッチェフのサインのあるページとは別の筆跡で書かれているために真偽が「警戒」されているが、6巻本の編者は他の詩と同時に書かれたものと見なしている。作者については議論が

分かれている²⁴。

カルボナリによる 1820 年のナポリ革命の勃発に対応して、1820 年暮れから外交交渉が展開され、21 年に英・露・墺・仏・普の五カ国によって開催されたライバッハ会議が開催された。この会議でナポリ革命を鎮圧するためにオーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフは自軍をイタリアに侵攻させることを提案した。会議に於いてオーストリア軍の出兵が承認され、3 月にはオーストリア軍はナポリを占領した。おそらくこの詩は 20 年末から 21 年 3 月までの間に書かれたと思われる。ただし、ナポリ革命をめぐるこの一連の過程でアレクサンドル一世のロシアがオーストリアを「裏切った」とは考えられないので、この詩はオーストリア皇帝の杞憂を、当時まだモスクワ大学の学生だったチュッチェフが風刺したものと考えられる。「鼻をくっつけた」(приставить нос ペテンにかけた)と「角を付けた」(наставить рог 裏切った)を掛けた言葉遊びのようにも見えるが、この詩から、1822 年に外務院(後の外務省)に就職する以前からチュッチェフが国際政治に興味を持っていたことが伺える。

7) 無題²⁵

詩人の才能をいかに判定しようというのだろうか
 彼らの誤りが優勢なことについて、—
 弾薬庫が学習院であったような人が
 畜産業のみに才ある人が。

1821 年からモスクワ大学で鉱物学と農学の講義をしていた M. Г. パヴロフをテーマにしていると考えられている²⁶。モスクワ大学におけるパヴロフについてはゲルツェンがその自伝『過去と思索』の中で、ドイツ哲学の紹介者として回想している²⁷。この詩から判断すると、ゲルツェンによっては肯定的に評価されていたパヴロフだが、チュッチェフの評価は否定的である。

8) 無題²⁸

いかなる月桂冠を与えるべきか
ロシアのパルナツソス山の弟子に、
タツソ²⁹の強力な靈感の刻印が
その上に横たわる人に？
君は月桂冠をほしくないのか、いや、－
それは君の魂には忌まわしい
君のすばらしい詩人が－
君のタツソが－死に瀕して以来³⁰。
君はその貢ぎ物を地面から取ることができなかったが、
亡びたシオンの娘たちは³¹
シャロンの村の百合と薔薇で作った³²
別の栄冠を君に編んだ。

16世紀のイタリア抒情詩人タツソの作品を、当時ロシア語に翻訳していたライチに捧げられたもの。古代世界の逸話や聖書の記述を下敷きに、イタリア・ルネッサンス詩人のタツソの悲劇的な人生を織り込んだ、ロマン主義的な作品である。ライチの訳で『解放されたエルサレム』が1828年にロシア語で出版されている。全集の編者は1827年12月の作としている³³。

9) 無題³⁴

何という歌だろう、いとしい君よ、
あたりにはただ憎悪の叫びのみ、
他方胸には一種の闇のごとくに、
大も小も人を盲目にする

そんな人の愚かさについての痛みがあるときに？

何という歌だろう、

老人たちが疫病神のように、思想をむち打ち、
武装し騎乗した大群をともなって

子供と戦っている国で？

その思想が、まっすぐな道を奪われて、

盗人となって裏通りを徘徊し、

粗野な番人から隠れて、

ただ子供たちの中に庇護者を見出す、そんな国で？

おおわが祖国よ！ どうして決して

死の障害無しに、深い断崖無しに、

お前の広い平野の川のごとくに、

理性的な仕事の道を行かないのか？

そして思想は永遠に、力があるところにはない、

他方力は永く暗い

そして墓場のように、答えず、

そして墓場のように、冷たいのではないか？

思想は…何千ものスパイの中で、

悪い無学者の狩り出しのための小動物のように…

国立中央歴史文学文書館に所蔵されているチュッチェフの娘マリア (M. Ф.

Ф. И. チュッチェフ政治詩試訳(14) (大矢 温)

ビリレヴァ)の文書の中にこの詩の写しが発見されたと言うことで、1987年の詩集に初めて公表された。この写しの紙とインクから、この写しがかかれたのはチュッチェフ一家が合成インクを使用するようになる1857年以降だと考えられている。詩の後半は別の紙に書かれていたため、失われている。おそらく1861年の学生騒擾とペテルブルク大学の閉鎖についての作品と考えられる³⁵。ただし6巻本の編者はその写しを確認していないために「チュッチェフの作とされている詩」に分類している³⁶。

思想弾圧に否定的なチュッチェフの姿勢は1857年の『ロシアにおける検閲』で開陳されているが、この詩においてもチュッチェフはロシアにおける思想弾圧を嘆いている。注意すべきは、チュッチェフが必ずしも「子供たち」の思想に同調しているわけではない、という点である。『ロシアにおける検閲』において主張されたのは、自由な討論を経ればロシアにおいて革命思想は必ずや論破されるに違いない、という見地からの検閲の緩和であった。

10) 無題³⁷

私は自然の美を評価しない、
魂が動揺したとき、
鉛色の不幸が
哀れな魂に悪夢によって影落とすときに。
自然の最上の美を
年々、日々はしばしば替える
おそらく、我らのうちで理解するのは、百人に一人、
我々が自然に似ているにすぎないことを。
いや、それはあらかじめ停滞しているので
その中に悲痛な気持ちを呼び起こさない。
われらは自らの魂の中に疲労を

より重く、よりつらく運ぶべきなのだ。
自然の有毒な大気が
常に我らを中毒させるわけではない：
我らは自己愛に包まれている—
そしてその災いは我らを破滅させる。

1865年頃の作品とされているが、手稿が失われているため、チュツチェフの作であることの実証がない³⁸。最初にこの詩を作品集に入れたブイコフによれば、この詩は「娘たち、および彼に特に熱愛されたもの」の死後、つまり1865年以降に書かれたという³⁹。

11) 無題⁴⁰

天穹の己の道を通り抜けつつ、
太陽は知っているのか、
まさにそれが自然に生命を
金色に輝きながら注ぎ込んでいることを、

その光線によって
神が花に模様を描くことを、
地の主に果実を恵むことを、
川に真珠を生むことを？

あなたは、ごすべてのものに（やさし気な）⁴¹
あなたの視線を注ぎつつ、存知ですか、
私のすべての命と活力が
あなたの燃えるようなまなざしの中にあることを。

この詩もまた、ロシア国立文書館のゴルチャコフ文書に写本はあるものの、手稿が現存しないためにチュッチェフの作であることに確証がない。『叙情詩』の編集者ピガリョーフは、この詩のリズムやスタイルからチュッチェフの作だと見なしている。また、ピガリョーフはこれをチュッチェフがゴルチャコフとしばしば会っていた 60 年代の作とし、若干の留保を付けながらも Н. С. Акинфиев に宛てたものと考えている⁴²。6 巻本の編者もこの意見を尊重している⁴³。

注

- ¹ Тарасов Б. Н. сост. Ф. И. Тютчев: Россия и Запад. М., 2007.
- ² Тютчев Ф. И. «*** (От жизни той, что бушевала здесь...)» // Полное собрание сочинений и письма в шести томах. М., 2002-2004 (в дальнейшем “Тютчев”). Т. 2. С. 234.
- ³ “Комментария” // Там же. С. 599. 同様に手稿に書き込まれた妻エルネスチーナに当てた追伸ではシーシュ Шиж と記しているが、この地名には複数の綴り方があった。 Brockhaus-Enzyklopädie によれば、フシーシュ Вшиж、あるいはフシжешек、シーシュ Шиж と呼ばれていた。
- ⁴ См. Энциклопедический словарь. СПб, Ф. А. Брокгауз и И. А. Ефрон, 1890-1907. Т. 13. С. 461-462.
- ⁵ 大矢「Ф. И. チュッチェフ政治詩試訳(6)」、『文化と言語』68号、2008年3月、112-113頁参照。
- ⁶ «Памяти М. К. Политковской» // Тютчев. Т. 2. С. 236.
- ⁷ 「最期の別れを言う」の意味。
- ⁸ “Комментария” // Там же. С. 601.
- ⁹ «17-ое апреля 1818» // Там же. С. 255.
- ¹⁰ 1930年に破壊されるまで、クレムリン城内、現在の14号棟のあたりにあった男子修道院。
- ¹¹ “Комментария” // Там же. С. 613.
- ¹² 「イヴァン・ニコライヴィッチは…4月17日早朝にチュッチェフをクレムリンに連れて行った。しかしそこで鐘と大砲が、まさにその時、赤ん坊の、将来のツァーリ、アレクサンドル・ニコライヴィッチ陛下の誕生を知らせた。この状況は若いチュッチェフに強い印象を与えた」。 Аксаков И. С. Биография Ф. И. Тютчева. М., 1886. С. 14. 「15才」、というのはアクサーコフの誤りとおもわれる。
- ¹³ Там же.

- 14 *Денисман Т. Г. и др.* Летопись жизни и творчества Ф. И. Тютчева. «Мураново», 1999. Т. 1. С. 29.
- 15 *Аксаков.* Биография. С. 15.
- 16 大矢 「政治詩試訳(6)」、123-124 頁参照。
- 17 «Бессонница» // Тютчев. Т. 2. С. 258.
- 18 人類一般のこと、というよりは卑下の *мы*、チュッチェフ個人のことと解釈した。
- 19 (ニキテンコ II-474)
- 20 *Аксаков.* С. 309. 「ナポレオン三世」も合わせて参照されたい。大矢他 「Ф. И. Чюцчэф政治詩試訳(4)」、『文化と言語』66号、2007年3月、61-62頁。
- 21 Летопись. С. 230-231.
- 22 «*** (Бывают роковые дни...)» // Тютчев. Т. 2. С. 260.
- 23 «*** (Австрийский царь привык забавить...)» // Там же. С. 262.
- 24 “Комментария” // Там же. С. 618.
- 25 «*** (Ну, как тому судить поэтов дар...)» // Там же. С. 263.
- 26 “Комментария” // Там же. С. 619.
- 27 ゲルツェンによれば、彼は本業の物理学や農業経済より哲学の分野で貢献した。「彼の講義によって物理学を修得することは難しいことだった。農業経済を学に至っては不可能だった。だが、彼の講義は非常に有意義だった。」*Герцен А. И.* “Былое и думы” // Собрание сочинений в тридцати томах. М., 1956. Т.9. С. 16
- 28 «*** (Каким венком нам увенчать...)» // Там же. С. 264.
- 29 トルクアート・タッソ Torquato Tasso (1544-1596)。
- 30 タッソの晩年、教皇クレメンス八世は彼を桂冠詩人にしようとローマに招聘したが、タッソは桂冠を受ける前に病死している。
- 31 旧約聖書ゼバニア書には神の怒りによって滅ぼされる諸民族と「シオンの娘」「エルサレムの娘」のもとに「王」がやって来る預言が記されている。旧約聖書ゼバニア書第9章参照。
- 32 シャロンの村：エルサレムの地名。旧約聖書に「シャロンのばら、谷のゆり」という記述がある。旧約聖書雅歌第2章参照。
- 33 “Комментария” // Тютчев. Т. 2. С. 620.
- 34 «*** (Какие песни, милый мой...)» // Там же. С. 265.
- 35 *Тютчев Ф. И.* Полное собрание стихотворений. Л., 1987. С. 422.
- 36 “Комментария” // Тютчев. Т. 2. С. 620.
- 37 «*** (Я не ценю красот природы...)» // Там же. С. 266.
- 38 『叙情詩』の編者ピガリョーフはチュッチェフの作であることに対して「深刻な不信」を抱いている。*Тютчев Ф. И.* Лирика: в 2 т. АН СССР, 1966. Т. 2. С. 435.
- 39 “Комментария” // Тютчев. Т. 2. С. 621.
- 40 «*** (Проходя свой путь по своду...)» // Там же. С. 268.

Ф. И. チュッチェフ政治詩試訳(14) (大矢 温)

- 4¹ 現存する写本では 9 行目の (やさしい) милый は смилый となっていたが、ピガリョーフはこれを「筆写時の誤り」として (やさしい) としている。これは当時のチュッチェフの書体の癖を考慮してのことである。
- 4² *Тютчев Ф. И. Лирика: в 2 т. АН СССР, 1966. Т. 2. С. 434.*
- 4³ “Комментария” // Тютчев. Т. 2. С. 622.

(本研究は、科研費 (基盤研究(B)21330030) の助成を受けたものである。)